

# 再び政治を語る

今までこの紙面では政治的な発言は慎んできた。といって私にも政治的意見がないわけではない。前号では「何とかファースト」の話をした。書き終わるとどうも説明不足の気がする。

実は経済と政治は密接不可分だ。経済の発展には政治的、あるいは制度的担保が必要だ。経済にもルールがなければ安心して取引ができない。そのため、民法・商法など法が作られる。ところが格差の問題は国内格差もあるが、大きくは国際格差だ。そのためには国際法、国際ルールとなるのだが、そのようなものはあつて無きがごときものだ。その都度変わるし、大国の力によって簡単にねじまげられる。なぜならこの地球に世界政府はないからだ。いくら国連などで国際法を作っても世界政府がない以上、誰も強制力を持ってそれを守らせることができない。

い。そこが一国の場合と大きな違いだ。マックス・ウェバーが言ったように、国家の意味は暴力の独占、強制力なのだ。そのない世界では結局は誰でも自分ファーストでやっている。北朝鮮のように小国で瀬戸際外交を行うものもある。失うものが少ないものほどそのようなやり方是可以する。

グローバリズムとはそれをもっとルー化しよう、協調しようということである。最終的にはそれが皆の利益になるんだとの主張だ。しかし現実に行われることは、中国の鄧小平の言った先富論（先に豊かになれる者が先に行き、後の者を助ける）や新自由主義者の言うトリクルダウン効果（上流の水が下流にしたたり落ちる）のようなものだ。中国は共産党が政府主導でおこなったが、世界の改革

開放は強権的世界政府があるわけではない。後に取り残された者は、先に進んだ者が助けるなどと言った美辞麗句は信じない。そのためおれがおれがの、おれがファーストとなる。結局血が流れる。

前号でグローバリズムとは政治的には民主制、経済的には市場経済と書いた。さらに言えば、現代の民主制は代議制と多数決原理だ。それが制度的担保だ。そうすると政治家はどうしても多数派に迎合するようになる。

民主制についてはイギリスの政治家チャーチルの有名な言葉に付け加えるものはない。チャーチルは一九四七年に既に次のように言っている。「民主制が完全に賢明であると思わせることは誰にも出来ない。はつきり言うと、民主制は最悪の政治形態と言えぬ。これまでに試み

られてきた民主制以外のあらゆる政治形態を除けばだが。

この現実には抗し、地上において賢明さを求めたものは悪魔と手を結ぶことになる。「悪魔は年を取っている」（ゲーテ「ファースト」）ので賢明なのだ。そのため歴史上、何回も繰り返された、地上天国実現の試みは全て悲惨な結末となった。「心情倫理家が突然千年期説の預言者に急変したり、たとえば、つい先までは『力に対しては愛を』と説教していたものが、次の瞬間には力に訴えたり……」（マックス・ウェバー「職業としての政治」）一方の市場経済だが、アダム・スミスの言うように市場の参加者が善良であるわけではない。市場での賢明さとは個人

利益の極大化である。その個人利益の総和が社会の発展をもたらす。そこには無欲であるが故の犠牲者も生む。しかし市場がないことによる悲惨よりもましなものなのかもしれない。

有名な日本神話「海幸山幸」の話を考えてみよう。

海の物を得ていた海幸彦と山の物を得ていた山幸彦は、ある日それぞれの得物を交換することにする。しかし不慣れた得物では結局どちらも成果はない。挙句の果てに山幸彦は借りた釣り針をなくしてしまう。山幸彦の剣での償いの申し出も拒否され、あくまでも現物での返還を求められる。海の漁で生活している海幸彦にとって剣などなんの価値もないからである。

この話から皆さんは、海幸彦と山幸彦はそれぞれの産物を交換すれば良かったのではないかと考えるだろう。しかし通貨のない時代、交換価値を決めることは難しい。それ以上に通貨の意味は信用の創造である。つまり海幸彦の魚と山幸彦の動物が同時にあるとは限らないということだ。それは限られた偶然の中でしか

ありえない。

その後のいきさつは諸説あるが、いずれも本質は穏やかな話ではない。海幸彦による山幸彦の迫害、山幸彦の逃亡、仲間の助けを得ての山幸彦の反攻、山幸彦の勝利となる。ここには何の倫理的教訓もない。歴史的現実だけである。市場の不在による力による抗争だ。

ここでは市場だけではなく通貨もない。だから金銭による損害賠償もできない。過ちを償う道がない。市場や通貨のありがたみによく分かる話だ。この話で教訓を導くとすると、正邪に係わらず強いもの、数の多い者が勝つということか。海幸彦は自分に非はないと信じているから、援軍を得ようとはしない。そのため逃げ、放浪中仲間を得た山幸彦に負けてしまう。この勝った山幸彦の末が日本のヤマトの朝廷だというのがこの話のオチになる。

余談だが、私はヤマト盆地を指すヤマトとは「山の処」と言う意味だと思ふ。邪馬台国はヤマタイコクと読んでいて、中国人の聞き取った発音に漢字をあてたものなので、本当はヤマトコクかもしれない。ちなみに「水の処」はミナトであろう。

代表取締役社長

鈴木英介

